

パネル

近代にかけての日本仏教の連続と断絶を全体のモチーフとして、研究の新たな展開を目指す。引野亨輔は、近世の浄土宗と真宗の論争を題材として、法然と親鸞という師弟関係の上に立つ両宗が、それぞれ自己の優位を築くための論法を分析し、近世的な宗派意識が成立していく過程を論じた。谷川穰は、明治前期における公教育と仏教の関係について、四期に分けて歴史的考察を行い、両者が分離と接近を繰り返しながらも、明治三年の宗教教育禁止の訓令に至るまでに、徐々に住み分けが進んでいくことを明らかにした。西村玲は、近世の大乗非仏説は富永仲基のみならず、釈尊教団の再現を目指した律僧の実践行から生まれた疑問でもあることを示して、村上專精が両者を利用して近代の大乗論を形成したことを述べた。オリオン・クラウタウは、明治期における宗派性と通仏教概念の関わりについて、「日本仏教」がどのように語られたかに着目し、村上專精が宗門と官学アカデミズムを「日本仏教史」として一体化したことを論じた。

この四者の発表を受けて、林淳は、引野・西村は近世からの近代形成について論じ、谷川・クラウタウは近代独自の側面を論じたと論評した。本パネルの趣旨を総括して、前近代の文化資源を利用して、近代的な仏教が再編成されたと述べた上で、近代仏教のトランスナショナルな性格についての分析が欠けたことを指摘した。フロアからは複数の質問者によって、「宗派」という言葉は、時代的にその内実が変遷しており、近代的な宗派概念では一概に論じられないという意見が出された。

明治仏教の国際化と変貌

代表者・司会 吉永進一
コメンテータ 石井公成

明治二〇年代仏教界における

神智学をめぐる言説

吉 永 進 一

明治時代の仏教と神智学については、すでに佐藤哲朗、Judith Snodgrassらの研究があるが、本発表では明治二〇年代の仏教メディアに表われた神智学関係の記事を材料として、そのブームの様相と思想的な遺産を検証したい。

明治二二年、神智学協会会長H・S・オルコットは第一回の来日を果たし、全国各地で演説会を開き、大成功を収めた。一方これと平行して神智学の翻訳記事が仏教メディアを賑わせていた。とりわけ普通教校では、アメリカカ神智学協会W・Q・ジャッジとの文通を機に、世界各地の仏教徒つまり神智学徒との交流を開始して、『反省会雑誌』創刊号から「欧米通信」なる記事を連載している。この記事が好評であったために、欧米への本格的な文書伝道を行う海外宣教会が発足、また海外仏教徒の記事を集めた『海外仏教事情』が創刊されている。しかし、明治二二年をピークに神智学記事の数も激減し、オルコットの明治二四年の第二回来日は失敗に終わっている。この二回目の

来日は、南北仏教の同盟結成のために作成された一四ヶ条の基本的教義への署名をもらうための旅行であったが、浄土真宗からは署名を拒否されて、彼の意図は失敗に終わっている。このような仏教統一という理念は、神智学の反セクト主義から出たものであるが、当時の日本では受け入れられるものではなかった。明治二〇年代前半、表面的にはオルコットは成功したものの、実は白人仏教徒として成功しただけであって、神智学の教理はほとんど反響をもたさなかった。

明治二〇年代後半になると、普通教校出身者を中心として、青年仏教者からの神智学思想を消化して、新たな宗教論を提案する記事が増えている。最初にある程度、神智学を咀嚼したものではないかと思われるのは、オルコット招聘に動いた平井金三である。平井は明治二〇年代にはいち早く諸宗教の一致を主張し、『総合宗教』synthetic religionを唱えている。アメリカの『アリーナ』Arena誌に発表したものによれば、日本人は偶像崇拜者ではなく真理探究者である。ただし信仰の対象は理解されない不可知であり、そのような不可知の实在entityへの信仰がすべての宗教に共通している。その実在を中心として、それらの諸宗教を総合することによって、より完全な真理を得ることが出来ると述べている。用語からしてスペンサー哲学の影響が大きいが、アメリカの新聞に書かれた「マハーヤーナとヒナヤーナ」と題する講演記事では、神智学の中に自分の宗教論と共通するものを見ている。しかし、彼はシカゴでは神智学ではなく最も急進的なユニテリアンのジェンキン・ロイド・ジョーンズと意気投合し、帰国後もユニテリアンに参加してい

る。

平井と対照的な神智学論として古河老川と田岡嶺雲のものがある。いずれも現代は懐疑の時代であり、そこから救済されるためには神秘経験が重要であり、その経験をもちたシステムとして催眠術と神智学を重視していた。田岡は、催眠術によって新しい神秘哲学が建設されることや、二十世紀には東西両文明が相互に融合した新しい文明が起るのではないかと予言している。また、禅定とは、意思を凝集することで、エネルギーを一点に集中させて無我になる技法であると単純化した上で、「神というも我主観の境界なり、仏というも我主観の境界なり、主観の境界を客観に表象して、是を神とも仏とも、いへるなるのみ。故に即心即仏なり、天国は我の内にあり」と述べて、宗教や倫理説などは皆無我に向かっているとも述べている。こうした「経験」による宗教の基礎づけは時代に先駆けたものであった。古河は天折し田岡の目指した神秘主義の体系化は頓挫したが、鈴木大拙の初期禅論には田岡の禅論が影を落としている可能性はある。

明治期仏教とユニテリアニズム

——佐治實然を手がかりに——

高橋 原

佐治實然は、真宗大谷派の僧侶であったが還俗してユニテリ